

対話をもたらすもの —ACOP における考察—

青山真樹

京都造形芸術大学芸術表現・アートプロデュース学科 2009 年度卒業

▼序文

私たちは、常日頃から人との関わりの中で生を営んでおり、主にその関わりは言語によるコミュニケーションでもってなされる。言語コミュニケーションの中で、私たちが自分自身を表現し、相手の言葉に耳を傾ける時、それまで気づかなかった自分との出会いや発見、また、思わぬ考え方の変化や発想の転換をもたらすこともある。

20 世紀のロシアの哲学者バフチン (Bakhtin . M . M , 1895-1975) は、対話によって自己がすでに持っていた見解やその立場を変えることが可能となり、その結果、相互が豊穡化すると説いている。しかしバフチンの提言を成り立たせるためには、対話は、単なる情報の伝達として終わってはいならない。なぜならば、対話を、言語によって意味が一方からもう片方へ伝えられるだけの「線状モデル¹⁾」の繰り返しとして捉えている限り、話し手の意図は聞き手の中で個人的に構成され、そこで完結してしまうからである。だからこそバフチンは、対話における聞き手の能動性に関しても言及している。聞き手は、話し手の発する言葉の意味を知覚し理解しながら、なんらかのかたちで必ず返答を生み出す、つまり、聞き手が話者になるという、立場の循環を重要視したのだ。聞き手の反応をも含んだ継続的な双方向、かつ螺旋状モデルこそが対話であると彼は考えたのだ。これは、対話の本質を意味の伝達ではなく、話し手／聞き手の相互循環による意味の交換と捉える視点である。

さらに今日では社会構成主義の立場から、『対話や行為の不断の相互作用を通して、現実が構成される』²⁾といったように、それまで話し手や聞き手から独立して客観的に存在するとされていた意味や意図は、関わり合いの中のコンテクストによって生成され続けるとする視点がある。話し手は、言語によって意図そのものを伝えるのではなく、「ある事柄を語ること」の中にこそ意味や意図は織り込まれており、さらに聞き手が、話し手の語ったことに対して語るという継続的なやりとりの中で、互いに折り合いをつけながら相手の意図を成立させるという理論だ。

それではいったい、対話において相手と関わり合うということはどういうことなのだろうか。また、それはどのような場において、どのように起こりうるのだろうか。これを考察するのが、本論文で扱うテーマである。

京都造形芸術大学芸術表現・アートプロデュース学科の必修カリキュラムとして（履修生は 1 年生と編入 3 年生）、福のり子教授の指導のもとで実施されている ACOP (Art Communication Project) では、対話によるグループでの作品鑑賞を提唱している。学生たちは本カリキュラムで、「みる・考える・話す・聞く」の 4 点を基本としたグループ鑑賞法に鑑賞者として触れ、そして、「ナビゲーター」として実践を行う（「ナビゲーター」については、本論文の第 2 章の ii 節で詳しく語る）。言うなれば学生たちは、年間を通して“対話”に取り組むというわけだ。筆者自身も過去にこのカリキュラムを経験している。その中で、対話という行為に取り組んだことによってもたらされた変化を体感したのである。その変化は、対話というものに対する捉え方に、そして他者という存在に対する姿勢において表れたのである。しかし、それらがどのように変化したのかという、具体的な内容を挙げられるまでには至っていない。その点をより明確にしたいという動機から、本論では ACOP における対話の実践を通して、学生たちにどのような変化が見られるのかを提示し、解釈を加えていく。また、その変化をもたらすこととなった契機というものを見出すことで、対話の中にどのような関わり合いがあり、どのように意味が生じるのか、そしてその結果を解釈することで、“場”そのものをより具体的な形で示すことが出来るのではないだろうかと考える。その作業を通して、筆者が体験し、言語化できなかった「変化」を、より明確にしてみたい。

▼第1章

本論で扱う ACOP とは、社会構成主義の視点から対話というものを捉え、実践していくプロジェクトであると筆者は考える。なぜなら ACOP における対話とは、“作品”という、あらかじめ答えの用意されていない対象に関して、ひとつの答えを求めずに語り合うことであり、作品と鑑賞者という関わり合いの中から何かを見出すことであるからだ。さらには、グループで対話するという点においても、自己完結ではない、それぞれが関わり合ったうえでこそその文脈、そしてその中から生み出される解釈／意味の生成をこそ目的としていることが挙げられる。従って、社会構成主義とはなにかについて、明確にすることから始めたい。また、ACOP でなぜグループで対話することの意義を提唱しているのかを考えるために、スイスの心理学者ピアジェ（Jean Piaget, 1896-1980）による構成主義に関しても言及しておく。社会構成主義はその分析単位を“社会的集団や文化”、一方、構成主義のそれは“個人”である。“個人”“集団”という単位の大小に従って、まずはピアジェによる構成主義について、その後、社会構成主義について述べていくこととする。

i. 心理学における構成主義

心理学における構成主義において、意味とは経験から切り離された外界の現実を表すものではなく（この点においては、後に述べる社会的構成主義も同じである）、個人の中で絶え間なく構成され続けると捉えられている。ピアジェは、人は発達の各時期で「シエマ（schema）」と呼ばれる、個人の過去の経験、記憶、知識を集積し、自分固有の“知識や解釈の枠組”のようなものを形成するとした。そして、形成されたシエマという個人的なフィルターを通して、新しい経験をそれに適応するように調整する「同化（assimilation）」と呼ばれる発達の過程を示したのである。シエマは、その後の感情生起や行動決定、情報処理の枠組の基盤とも言えるものだ。また、同化の過程における混乱の結果として生まれる「調節（accommodation）」という行程を提示し、新たな経験を、すでに自らの内にあったシエマに同化することができなかった場合、その構造を外界から受けた変化に応じて再調整するとした。これらの発達過程を経ることにより、新たな実行可能な行動様式が次々に獲得され、個人の中に蓄積されていくのだという。

ピアジェが自身の発達理論で扱っていたシエマとは、主に知能という側面からの狭義のものではあったが、この考えは、その後に続く心理学的構成主義の見解における根幹となる。この理論からは、個人の心から独立した構成はないと考えることができ、ひとつの事柄に対する意味は、個人の中で蓄積されたシエマに照合され、判断されることとなる。したがって、少し乱暴な言い方をすれば、10人いればその意味も10通りあるということである。それは、他者や事実の存在についても同様に行うことができる。主体は、同化と調節の過程によって、客体（他者、事実）を本質的に自分のようにみなす。つまり主体は、他者の考えや事実を自分の考えと並行させて構成するのである。このように、心理学における構成主義は、その考え方の中心に自明の存在として個人を据え、その発達過程において徐々に社会的なものが形を成しうるという立場をとっているのである。

ii. 社会的構成主義

社会的構成主義では、社会こそが、意味の構成において本質的な役割をもつと主張する。私たちが現実として写しとっている実世界の事象は、関係性によって常に変化すると考え、また、その考え方の中心を個人の心や意識ではなく、あくまでも社会（共同体）に置いているのだ。それは、個人の心や意識といったものでさえも全て、歴史的・文化的な交流の産物として構成されたものであるという解釈である。

ピアジェは、子どもの独り言に見られるように、言語はまず、外界と結びつきを持たない個人的な思考の表れとしてあるとした「自己中心的言語」という理論を唱えている。それに対してロシアの心理学者であるヴィゴツキー（Lev Semenovich Vygotsky, 1896-1934）は、言語の発生をコミュニケ

ーションの手段、つまり社会的なものとして発生すると主張した。

『言語の最初の機能はコミュニケーション・社会的結合の機能であり、大人の側からにせよ子どもの側からにせよまわりのものに働きかける機能である。だから子どもの最初の言語は、純粋に社会的なものである。(中略)その後、成長の過程でのみ、多様な機能をもった子どもの社会的言語は、個々の機能の分化という原則にしたがって発達し、ある一定の年齢で、自己中心的言語とコミュニケーション的言語とにかなりはっきりと分化するようになる。(中略)これら二つの言語形式は、われわれの仮説の見地からすれば、ともに社会的なものであり、ただ異なる方向に向いた言語機能にすぎないからである。』³

上述のようにヴィゴツキーは、言語はまず社会的機能として始まり、自己中心的言語を経た上で内言に転化していくとし、それは言語だけでなく、他の様々な精神発達においても同様であると考えた。

社会心理学者のガーゲン (Kenneth J. Gergen, 1937-) は、言語が社会的実践や生活の中にすでに埋めこまれているという前提から、全ては言語によって作りあげられたものであると考えた。内界／外界や自己／他者が真実であるかという問い自体、無意味だとしたのだ。意味とは、主観的なものではなく、間主観的⁴で、自明の存在などというものはないと主張したのである。またガーゲンは、オーストリアの哲学者、ヴィトゲンシュタイン (Ludwig Wittgenstein, 1889-1951) が提唱した「言語ゲーム」⁵をもとに、全ての事象は、ある社会的、文化的、歴史的ルールやパターンの中でのみ機能するとした。言いかえるならば、明白であるように見える現象に関しても、それぞれの関わり方やニーズにより多面的な見方を構築することができるということなのだ。

ヴィゴツキーとガーゲンは、ともに社会的構成主義の立場をとりながらも、そのアプローチには若干の違いが見られる。ヴィゴツキーが社会的な言語の機能から解明しようとしたものは、人間の意識に関するところである。その意味で、社会-心理的構成主義 (Social constructivism) と分類され、あくまでも個人の心が、外界との関係、とりわけ社会的な関係からの影響を強く受けて現実を構成するとした。対するガーゲンは、個人の考え、あるいは認識でさえもすべては関係性の中にしかありえないとし、対話が社会的な関係の中で果たしている機能を何よりも強調する考え方をとっている。また、その着地点を、“関係を生成しつづける”という実践的なものとして捉えていたのである。これが、社会構成主義 (Social constructionism) の立場である。

▼第2章

第1章では、大きく2つの視点からの構成主義について述べた。ピアジェによる構成主義において「意味」は、あくまでも個人的に、内的に構成されることとなる。対する社会構成主義では、「意味」とは、社会的に間主観的に構成されると捉えている。

本章では、本論文の主眼である、対話について言及する。それにあたり、まずはACOPについて、社会構成主義の視点を絡めて説明をしておきたい。続いて、学生による3ヶ月間に及び行われたACOPの記録をもとに、その中で見られた変化について、第1章の内容を踏まえたうえで考察していく。

i. ACOP (Art Communication Project) の提唱する「対話」

ACOPとは、知識だけに頼らない、対話を基本とした作品鑑賞を提唱する鑑賞教育プログラムである。複数の人と共に作品を見、それぞれが思ったことや感じたこと、あるいは疑問点などを話し合っていくという形でセッション (鑑賞会) は進められる。ACOPは“鑑賞”、そして“対話”という二大柱で成っているとと言っても過言ではないだろう。それではまず、年間を通して行われるACOPで行われる“対話”の意義について考えていきたい。

先述したようにACOPは、複数人で行われるプログラムである。『ひとりでは10人分の発見はできない。ひとりでもみたら、自分の思う範囲までしか歩いていけないけれど、ACOPのようにコミュニケーションを用いて他者とみたら、今まで行ったことのないところまで飛んでいける。』⁶と

いう、ACOPを経験した学生の言葉からもわかるように、ひとりでは見えなかったことや気づきえなかったこと、考えが及ばなかったことなどを新たに発見することや、それらを共有することが可能となる場なのである。しかし、例え複数人でこの鑑賞会が行われたとしても、それだけならば序章で述べたように、一方からもう片方への情報の伝達で事足りるだろう。意味や意図を正確に、誤解をさせない話し方で伝えることだけを目標とすれば済むのである。後は、情報を得た各々の中で勝手に意味を再構築すれば良いとも言える。ところが、それは『鑑賞者の言葉は、ある意味、作品よりも生々しくあざやかだ。同じものを見てもひとりひとり違う考え、違う表現を持っている。(中略)そして、作品の可能性を閉ざさないためにも、鑑賞者の気持ちを汲み取るためにも、自分の器をもっともっと広げていくためにも、自分自身が常に鑑賞者であり続けることが大切』⁷という、同じくACOPを経験した学生の言葉で否定される。これらの言葉が示唆するところは、このACOPという場が、決して情報の伝達で終わりではないということだ。「作品の可能性を閉ざさない」ということは、その都度その都度で新たに生み出される意味や意図を投げ続けるという、継続的で動的な関係を意味するのだと筆者は考える。そもそもACOPにおいては、作品に客観的事実や意味などないことが前提となっているからである。それは、ガーゲンが主張したように、状況や関係の中で語られることで時々表れる“不定な自分”と同様、全ては言説の世界、そして関係性の中で支えられているにすぎず、従って「これが答えだから、それで終わり」などというような、思考停止は避けられるべきであるということではなかろうか。

作品、それを見て語る自分、同様に語る他者、その複数の視点や言説がそれぞれ関わり合い続けることで、ACOPにおける対話は意味あるものとなるのである。では、“関わり合う”ということは具体的にどのようなことなのか。その点を以降、明確にしていくこととする。

ii. セッションの流れ

本説では、具体的にどのようにしてセッションが、そして対話が進められていくのかという点を、以下に説明しておく。

まず、複数人で行われる鑑賞ということで、全員がその作品の細部までを見ることができるよう、前方のスクリーンに作品画像が投影される。映し出された作品画像を、数分間、隅々までじっくりと見ることからセッションは始められる。続いて、皆が同じもの(作品)を見ている状況のもと、それぞれが思うこと、感じとったことや疑問点などを言葉にし、それをその場にいる人々と確認、共有をしていくのである。しかし、それぞれが好き勝手に見て、語るだけではグループで鑑賞する意義が薄れてしまうため、ナビゲーターと呼ばれる存在が置かれる。

ナビゲーターが担う役割は、言うなれば交通整理のようなものである。複数の人がいれば、複数の視点、感じ方、考え方、そして表現の仕方がある。その様な状況において、視点を絞ったり、一見違うことを言っているように思える意見の中に共通性を見出す、もしくは対比させたりしながら、ひとつひとつの点を線に繋いでいき、全体としての対話を成り立たせる作業を行うのである。また、鑑賞者の発言に対する問いかけや、同意、ナビゲーター自身の鑑賞者としての意見を添えるなど、他の鑑賞者同様、話し手と聞き手といった立場を循環し対話に参加しながら、鑑賞者が作品を見、考え、聞き、話すことを促すのだ。ナビゲーターが話の流れを決めるというようなことはしないが、その時々でどのような話がされており、どう進みつつあるのかといったことを把握しておかなければならないという点で、「より良い聞き手」である(厳密には、聞き手であると同時に話し手でもある)ことが求められるのである。このようにして、ひとつの作品につき、30分程度を目安に、対話が進められる。

iii. セッションの記録／分析

前期に学生たちはまず、福によるナビゲートのもと、たくさんの作品を見ていく。その中で対話型鑑賞がどういったスタイルで進められるのかを体験するのである。この時点では、学生たちはまだ対話というものを深くは意識していないように見える。後期に入ると、自分たちがナビゲーターの役に

つき練習を重ねることとなる。10～15名程のグループに分かれ、それぞれが選んだ作品で、グループの他の学生を鑑賞者として、ナビゲーションの練習を行うのだ。何十回にも及ぶセッションを経験することで、より主体的に、意識的に対話に取り組みようになる。それは、先に述べたように、ナビゲーターの役割を担うためには「より良い聞き手（話し手）」であることが求められるため、真摯に対話の中に身を置く必要があるからだ。

本論では、ひとりの学生（2008年度「芸術表現演習」履修の編入3年生、女性）が、同年10月26日～11月20日の練習期間中にエドヴァルド・ムンクの「マドンナ」（1894-1895）を使用して行った4回分のセッション、及び実際に学外からボランティアの鑑賞者を招き、11月23日に行われた“本番”のセッションの音声データを文字起こししたものをを用いて、鑑賞者の発言に対する「返答」における、この学生の変化を見ていく。本章i節で述べたように、ACOPにおける対話とは、単なる意味や意図の伝達ではなく、相互作用的に続いていく。その点で“聞き手の反応”こそが、ある意味で対話の始発であり、対話における関わり合いの何たるかを見ることができないのではないかと考えるからである。故に、本論文では「返答」に注目して分析することにした。ここで留意しておきたい点は、セッション（対話）の内容や質は、その時々参加者の反応や状態——体調や気分など——により大きく変わるといえることである。従って、語られている内容に言及するというよりは、発言ひとつひとつの持つ、行為としての性質的な側面に重点を置いて見ていくこととする。

なお、セッションの文字データ中の「N」はナビゲーターの発言を、「A」は鑑賞者の発言を指す。「A」にはターンごとに数字を付け⁸、また、ひとつの話題に対し同じ人物が連続して発言した場合には、同じ数字を続けて符号する。セッションの流れを実際に見ておくために、初回のセッション（10月26日）全体の記録を資料として添付しておく（《資料①》参照）。その後、分析に使用した箇所をセッションの記録より抜粋し、同じく資料として添付していくこととする。

【1】10月26日

本格的に練習が始まったこの時期、ナビゲーターの返答には、鑑賞者の発言に対して、それは作品の中、もしくは鑑賞者自身の中どこから出てきたものなのかを省み、より明細に言語化することを促すための“問いかけ”（「どこからそう思った？」「なぜそう思った？」）があった。その後には相づち（「ああー」「なるほど」「そっか」「そうですね」）、もしくは“おうむ返し”が続くというパターンが多く見られ、それが何度も繰り返されている。また、鑑賞者がまだ話終えていないうちから言葉を挟む場面がよく見られる。鑑賞者の発言を聞いていることを示す、受容の相づちだけでなく、鑑賞者の発言を繰り返したり、補足の言葉を挟むことも多い。

さらに、問いかけをせずやり過ごすターンも、所々で見られた。その結果、別の鑑賞者の中にその事が疑問として残り、そのために、何度か話が戻る場面があった（《資料②》参照）。

<A16～17>のターンのように、「どうすごい、どうすごい」とかおかしいよね...えーっと...などと、返答の仕方に悩み考え込む場面がたまに見られるが、結局、鑑賞者からの意見が出されることにより中断されてしまう。このような様子は、以後度々見られる。このナビゲーターの癖として、誰か特定の人物に問いかけるでもなく、「うわー、なんだろう、これ。ちょっと待って。」「えーっと、んーっと」といった具合に、ひとり言のように自問自答を口に出すということがあるようだ（《資料③》参照）。ここでは、ナビゲーターは聞き手として受動的な姿勢に終始しており、聞くことで彼女自身の中に何かしらの反応が生まれることはもとより、鑑賞者／ナビゲーター間において意味の伝達が成り立っている様子すら見てとることはできない。

鑑賞者の意見全てに相づちをうち、そのまま流していたため、結局「○○さんはこう思いました。△△くんはこう思いました」という、“鑑賞者同士の意味の交換という状況”を確認しているにすぎない。

このセッションで見られたナビゲーターの癖である、ひとり言のように自問自答を実際に口にする“ひとり喋り”については、今後のセッション分析においても、引き続き注目していくこととする。また、「ああー」「なるほど」などの、具体的に内容を表さない相づちと、おうむ返しについても同様に

追っていきたい。

本セッション 58 ターン (40 分 56 秒) 中、ひとり喋り 18 回、相づち／おうむ返しは 28 回あった。

【2】10月30日

前回のセッションに比べ、鑑賞者同士の意見の比較を試みるターンが見られるようになった。さらに、<A9～A10>のように、意見の相違点をより詳細に把握しようと問いかける様子や、<A12>のように、以前出てきた意見とは違う意見であることを明確にする姿勢もみられる。ただし、<A13>に対する返答から、「どちらの意見が優勢であるか」という視点によっていることが想像できる（《資料④》参照）。この姿勢は、「多数＝より正しい」という客観主義的思考とすることができる。

また、<A26>のターンに見られるように、鑑賞者の意図を正確に掴むための、積極的かつ具体的な質問も見られるようになった。しかし、その後続くのは相づち、おうむ返しであるため、あくまでも聞き手の立場に終始し続けていることには変わりはない（《資料⑤》参照）。

相づちとおうむ返しは相変わらず多く、51 ターン (42 分 41 秒) 中にひとり喋り 21 回、相づち／おうむ返しは 23 回だった。

【3】11月15日 ※《資料④》参照

<A9>のターンでは、鑑賞者の「メデューサみたいに見える」という意見を聞き、理解した上で自分の中に想起された「怖い」という言葉で返答した（“言い換え”）。この時、ナビゲーターは聞き手であると同時に、話し手としての立場であったと言える（《資料⑥》参照）。

また【1】【2】のセッションに比べ、<A15～17>に見られるように、より忠実に話し手の言葉を再現しようとするようになっている。しかし、その結果“詳しいおうむ返し”に陥ってしまっているのだ。ナビゲーター本人もその状況に違和感を感じ、苦悩しているようだ。同時に、ひとり喋りも相変わらず続けられている（《資料⑦》参照）。

<A19～20>のターンでは、おうむ返しは避けたものの、話し手の発信していないメッセージを解釈してしまい、誤解が発生している。また「～なんですかね？」という語尾には“相手の意図を確認”しているような印象を受ける（《資料⑧》参照）。このことから、この時点でのナビゲーターの基本的な姿勢として、“意味は相手（鑑賞者／話し手）の中にある”という前提があり、自身の能動的な対話への参加（返答）への試みが見られながらも、結果的に、その前提があることで阻止されてしまっているのではないだろうか。

相づちは減ったが、おうむ返しは相変わらず続く。22 ターン (28 分 5 秒) 中、ひとり喋り 11 回、相づち／おうむ返しは 10 回だった。

【4】11月20日

まず冒頭の、鑑賞者に対する声のかけ方が、これまでのセッションと変わった。これまでは「見てください」「話してください」という“Please”型だったのが、「見ましょう」「話していきましょう」という“Let's”型に変化したのだ（《資料⑨》参照）。

この回のセッションでは、ターン全体に対する「問いかけ」の割合が【1】～【3】に比べて増えている。また、それに答えた鑑賞者の発言に対するナビゲーターの返答に、具体的に内容を示さない相づちはなくなり、【3】のセッションでも見られたように、発言を聞いたことで思ったこと、もしくは発言に対する解釈が含まれた“言い換え”が行われている（《資料⑩》参照）。この時、ナビゲーターは聞き手であると同時に、話し手としての立場であったと言える。<A22>

このターンでも、結果的にその返答内容は本質からはずれてしまっているものの、鑑賞者の「女の人の身体を見たことがない」という発言を受け、それがどういう状況であるかを想像した結果、「例えば、女性がいつも服を着ているとか、そういうことですか？」と返している（《資料⑪》参照）。これらは、相手の発言を聞いたうえで、ナビゲーターが能動的に反応しようとした結果なのではないだ

ろうか（これについては、後述する<iv. 考察①>で詳しく述べる）。

ひとり喋りの回数は大きく減り、28ターン（27分58秒）中2回だった。そして、相づち／おうむ返しは、両方ともようやく0回になった。

【5】11月23日

ボランティアの鑑賞者を学外から迎え、鑑賞会の本番が行われた。このセッションにおいても、導入の言葉は「お話ししていきましょう」という“Let's”型だった。

この回に特徴的だったのは、「それを聞いて、どう思われますか」という問いかけ方が多く見られたことである。これまで【1】【2】のセッションにおいては1回ずつ、【3】では0回、【4】では2回だったこの問いかけが、本セッションでは7回あった。「他の方はどうですか」という問いかけは、これまでも見られたが、さらに「“他の鑑賞者の意見を聞いたうえで”、どう思うのか」という、相互関係の中で語ることを促しているものと考えられる。

「女性の中に女性がいる」という意見に対して「すごいシチュエーションである」と言い換えることで、より「描かれているものが特異”であるという“意味”を投げ込み、皆でさらに深く考えることを促すことができている（《資料⑫》参照）。また、<A22>や<A26>のように、返答として具体的な事象を例示することで、鑑賞者がそれぞれに抱いているイメージをより具体的なものとして共有し易くする場面も見られた（《資料⑬》参照）。

ひとり喋りは、34ターン（29分33秒）中0回、相づち／おうむ返しは2回だった。

iv. 考察①

iii節では、セッション内で実際に行われた対話を具体的に見ていくことで、回ごとに見られた特徴的なファクトを挙げてきた。それらを総括的に見た時、このナビゲーター（以下、学生Aとする）の対話に対する関わり方として、次の3つの段階があったと筆者は考える。

1. 傍観者

これは、【1】のセッションで特に顕著に見られたような、鑑賞者同士の意味の交換を第三者として確認するだけの、いわば対話に未参加の状態である。

2. 受動的に聞く

相手が言わんとしていることを捉えようとし始める。ただし、この段階では、相手の発言の“言葉通りの意味”のみが、捉える対象である。意味や意図は相手の中にあるという姿勢だと言える。

3. 能動的に聞く（聞いたことを受けて、反応する）

それまでは、鑑賞者からの発言に対し応答していたに過ぎなかったものが、対話中に自らの解釈を挟む許容余地を見出し始める。前段階での“聞くこと”が相手の意図や意味を理解しようとする事ならば、そこに解釈を挟むことにより“聞き手であり同時に話し手でもある”という循環を認識しながら、自分がどのように聞いているのかと同時に、語られたことに対してどのように語るのかという点に関しても意識的になっている。その表れのひとつとして、「言い換え」を上げることができる。

もちろん、上記のような段階ははっきりと区切られる類のものではなく、行きつ戻りつを繰り返しながら、あるいは重なり合いながら進んでいく大きな流れとして考えていただきたい。

4回のセッションの記録に渡って筆者が注目したひとり喋りは、目の前にいる人を対象とせず、自分から発信した言葉を自ら受け取るという点において、他者の存在を介入させず自己完結してしまうという、関わり合いの姿勢の欠如が考えられる。このことから、【4】のセッションでひとり喋りがほとんど見られなくなったことは、学生Aの中で何らかの変化が起きたと見ることができる。同様に、相づち／おうむ返しは、相手の言葉をそのまま受け取る、あるいは受け流すという意味で一方通行である。もちろん、相づちやおうむ返しという「応答を返している」という点においては、「あなたの話を聞いています」という合図を送っているわけだから、双方向であるとも言えなくはない。しかし、

その返答の質が、能動的か受動的かを考えた時に、未だ受動的性格が強いと考えられるため、相互的な関わり合いであるとは言にくい。【4】のセッションについて、具体的な内容を示さない相づちはなくなったと記したが、それは逆に言うならば、具体的に内容を示す相づちはあったということだ。それが“言い換え”という形の返答である。もちろん、全ての返答において成功していたとはいえないが、その試みが見られたということが重要なのだ。置き換えるということは、意見の対立を共通の関心を探るものへと作りかえるという質を含むという点で、相互性に向かうためのより能動的な返答であるからである。それは、学生 A が、“ただ一方的に聞く人”から“参加者”へと変化した（もしくは変化しつつある）とも言えるのではないだろうか。

先にも述べたように筆者は、明確な変化の“瞬間”というものは挙げることはできないと考える。しかし、セッション【4】以降において、学生 A に変化が生じたことは紛れもない事実である。次節では、このセッション【4】の直前に学生 A が体験していたある出来事を、彼女に変化をもたらしたひとつのきっかけとして取りあげ、考察していくこととする。

v. 考察②

筆者は、本論文のために学生 A にインタビューを行い、彼女の「変化」について尋ねた。学生 A は、「自分がナビゲーションをできるようになったきっかけは、グループのメンバーである I 君との話し合いだった」と自己分析してくれた。その話し合いの場が持たれたのは、11月21日、ちょうど【4】のセッションが行われた翌日のことである。時期こそ前後するが、その“きっかけ”に向かう経過の中で、彼女の中にどのような変化あったのかをインタビューと、後期3ヶ月の間学生が毎週書く「週間報告」⁹、そして2008年度のACOPの報告書に記載された内容をふまえて考察したい。

練習が始まって間もない頃、学生 A は、度々福のもとを訪れ、こう話していたという。「I 君を外して練習をしたい」。福がその理由をたずねると、「彼がいると、うまくナビゲーションに集中できないから」という答えだった。この頃の彼女の中には、「自分は自分、他人は他人」という確固たる境界線が存在し、自身がナビゲーションをできない理由を自らの“外”に見出していたのだと考えられる。そのことが、「外的な要因を取り除けばうまくいくはずである」という考えに彼女を至らしめていたのだろう。しかし、次第に彼女の姿勢に変化が起き始める。

「最初は、理解できない人や理解する必要がない人として扱っていたのに、それではダメだと先生に何度も言われて、I 君が分からない人なのではなく（分からない人ではないと言い切れないが...）私に分かろうと一切努力をしていなかったのだと気づいて、練習の中でもそれ以外でも彼に近づいて、一生懸命言葉を聞こうとしていきました。」¹⁰

セッション【3】が行われた6週目（11月10日～16日）の週間報告で、「嫌いな人・嫌なことは自分の中にある何かが反応しているからです」と、学生 A は書いている。それまで自らとは切り離された“外”に見出していたものが、実は彼女自身の中から生じていたのだという気があったことが、この記述からわかる。その気付きにより、「ナビゲーションができないのは I 君がいるから」という当初の考えから、「ナビゲーションができないのは I 君がいるから、と感じる自分」といったように、その状況と切り離しがたい存在として自身を見つめなおすという、自己内省の過程を学生 A は経ることとなる。それは、I 君を“邪魔な要因”として切り捨てるのではなく、I 君を通して自分自身を考えると、自他の関係の中での“私”の在り方を探る過程であったとも言えるだろう。

以上のような過程を経たうえで、本節冒頭に記したような話し合いが行われたわけである。その時のことを学生 A は、以下のように語っている。

「私は実行しているつもりでも、I 君にも直接宣言したわけではなかったから、芸術館¹¹から抜けて『紙コップ』¹²をしている時も I 君の指摘はすごく厳しいものだった。こちらが歩み寄ろうとし

ているのに、今までと変わらずに硬く厳しい態度の I 君に対して、私の近頃の努力を知ってほしい、認めてほしいと思ったのが、話すきっかけでした。思っていることや努力していることを人にあまり言ってこなかった私にとって、私を悩ませている相手に直接言うことが、壁の突破になったわけです。」¹³

学生 A はさらに続ける。

「(I 君に対し) わかるはずがないと決めつけて、勝手に壁を作っていた。分からないならどこが分からないのか、どこまで分かったのかを言えばよかったということに気づくまでに、大変時間かかった。(中略) I 君と話して泣いて、それでも向き合うことをやめない。それが本心からできたとき、ナビゲーションができるようになった。」¹⁴

つまり、この“きっかけとなった話し合い”の場で学生 A は、それまで自身の内で行われていた自己内省の過程や、それによって感じていたことを相手に投げかけたのである。学生 A が、I 君との関係を通して気づき、見つめなおした自分自身を、実際に言葉にして、他でもない I 君への反応として投げかけることで、彼の“応え”を求めたのだ。そこにあらかじめ用意された“答え”などはなく、非常に生々しい対話が行われたと推測できる。この直後に、学生 A はナビゲーションに成功している。

▼第 3 章

第 2 章では、実際のセッションの記録を分析することで、あるひとりの学生に見られた変化を解釈してきた。そこから見えてきたのは、まず対話における姿勢の変化、そして次に“自分”という存在の捉えよう、その立ち位置の変化であった。前者については、対話への参加という点で、当初は傍観者的だった学生 A が、徐々に能動性を帯び始めたことを述べた。後者については、学生 A 自身が“変化のきっかけ”として挙げた出来事、その出来事に向かっていく過程を考察することで、彼女の中で初めは完璧に別物であった“自分”と“他人”という枠組が、“自他の関係の中の自分”といった風になっていったことを示した。さらに、それらをふまえたうえでの相手との実質的な関わりが、結果的にこの学生のナビゲーションに大きな影響を与えたことを述べた。「対話における姿勢の変化」と「自分」という存在の捉えようとその立ち位置の変化」の二つは、互いに密接に関係していると筆者は考える。それらはどのように関係しているのか。本章では、その点について社会構成主義の視点から解釈し、述べていきたい。

当初、「自分は自分、他人は他人」といったように、学生 A の中には、自分とそれ以外との間には確固たる境界線が存在し、「私のことは私しかわからない」「他人のことは、その人じゃないからわからない」という個人主義的な自己論で完結されていた。極端な言い方をすれば、自分の周りで起きている事柄は全て、言葉の通り“他人事”であるという姿勢であり、そのことが、対話に対する傍観者的な姿勢を生み出していたとすることができる。また、「ナビゲーションができないのは、I 君がいるからである」といったように、自分の身に起こっている結果は、自分の外側に在る原因によってもたらされたものであるという、「客観的事実をつくり出して」¹⁵いたのである。

しかし、次の段階として、原因／結果という、それまで自身の内外に分けて考えていたものが、実は関わりの中で自らが見出していたにすぎないと、学生 A は気付いている。そのことで、客観的事実をつくり出すために用いられた、対象と距離を置いたレトリック¹⁶は、「ナビゲーションができないのは、I 君がいるから、と考える私」という、「私化のレトリック」¹⁷へと形を変えることになる。このことは、他人との関わりの中に自分がいることを意識することに繋がり、それに伴い、他人の言葉は“他人事”ではなく、耳を傾ける価値あるものとして肯定的に受け取られるようになったのだ。さらにそれらのプロセスをふむことで、“自分／他人”という、それまで自明だと思われていた構造に対する反省が行われ、新たに“関係の中の自分”という、より不定形なものとして自身を捉えるようになる。これ

は、独立した存在としての“自分”という、決まりきった枠組からの脱却である。そしてそのことこそが、社会構成主義が目指す「自省」と「解放」なのである¹⁸。

このように、自省と解放を経た学生 A は、対話の中でそれまで交えようとしなかった“他者の発言”と“自らの解釈”の間に、明確な境界はないのだという風に思い至る。なぜなら、解釈が加わらずに成立する発言はなく、そしてそれは反転して解釈そのものにも言い得ることだからである。そのように、連動的に続いていく行為こそが対話であるという気付きが、学生 A の対話への姿勢に変化をもたらしたと筆者は考える。セッション【4】以降に見られる言い換えや、鑑賞者への「他の人の意見を聞いて、どう思うか」といった問いかけは、そのような気付きがあったことによって、“自分”が、より開かれた存在として新たに意味付けられ、さらに他者との対話、そのコンテキストの中で生成され続けるということを体現している。

▼結

本論文を執筆するにあたり、ACOP という対話を用いたプロジェクトを分析対象とすることでより顕著に、目に見える形として、対話が私たちにもたらしうるものを捉えようと考えていた。実際にセッションの記録を分析してみた結果、対話というものに対する捉え方や、他者という存在に対する姿勢における、当初期待していたほどの大きな変化は発見することはできなかった。しかし、そんな中でも“目を見張る程の”というわけにはいかなかったものの、確実に変化は見る事ができた。

まず、量的には、ひとり喋りや相づち／おうむ返しの回数が最終的に限りなくゼロに近づいたことである。そして質的には、その要因を学生 A 自身の経験した事柄の中に見出すことで、その変化を捉えることができたことだ。ほんの一端ではあるが、対話をもたらしたのを見たのだと、筆者は考えている。それは、自身と向き合う真摯な姿勢であり、同時に他者との関わり合いである。“他者との関係の中であってこそ自分自身を見出すことができる”という学生 A の気付きは、“関係が変われば、見出すことのできる自分もまた変わる”ということの意味する。これは、第 1 章 ii 節で述べたように、それぞれの関わり方やニーズにより多面的な見方を構築することができるという、社会構成主義の基本的考えと一致していると言える。

以下は、第 2 章 i 節でも挙げた学生の言葉である。

『鑑賞者の言葉は、ある意味、作品よりも生々しくあざやかだ。同じものを見てもひとりひとり違う考え、違う表現を持っている。それらを漏れなく聴けるのがナビゲーターの幸せなところ。そして、作品の可能性を閉ざさないためにも、鑑賞者の気持ちを汲み取るためにも、自分の器をもっともっと広げていくためにも、自分自身が常に鑑賞者であり続けることが大切なのだ。』¹⁹ (下線筆者)

この言葉から、他者である鑑賞者に対して、作品に対して、自分自身に対して、そして何よりそれらの関わり合いに対して、“これはこうである”といったような決めつけではない“開かれた”姿勢を見とることができる。ACOP 指導教授である福は、2009 年夏に行われた、教師に向けた講演会で、上記の学生の言葉に対して以下のように語った。

「鑑賞者という言葉を生徒、そしてナビゲーターを教師という言葉に置き換えてみましょう。次に、鑑賞者という言葉他者、ナビゲーターを自分という言葉に置き換えてみましょう。生徒がいつのまにか教師に、そして他者が、いつのまにか自分になっているでしょう。教師と生徒、あるいは他者と自分の立場は、固定されたものではないのです。」

“自分”と“他者”との循環過程の中で行われる行為こそが対話であり、そしてその循環に終わりはない。『語られるべきことは常に残されている』²⁰のだ。

▽注釈

- 1 電気通信の分野で考えだされたコミュニケーションモデルで、話し手の意図が、正確に聞き手の中に復元されることを理想の状態としていた。
- 2 『構成主義が投げかける新しい教育』 p.9
- 3 『思考と言語』 p.67
- 4 人と人が出会ったところには、自然ともう一つの主観が発生するという考え方。カウンセリング場面でも、カウンセラーがクライアントを客観的に見て治療することはできず、2人が出会った時点でカウンセラーもクライアントの問題の中に入ってしまったため、2人の間で生まれる「第3の主観＝間主観」を考慮して治療をすべきだという考えから生まれた。
- 5 言語と、言語が織りこまれている行為を“言語ゲーム”と呼び、そのゲームの中で使われることにより、意味を獲得すると主張した。『言葉の意味とは、言語の中でその言葉がいかに使用されているかということ』
- 6 『2006年度 ACOP・鑑賞者研究プロジェクト報告書』 p.54
- 7 『2006年度 ACOP・鑑賞者研究プロジェクト報告書』 p.160
- 8 鑑賞者から意見、それに対するナビゲーターの返答までをひとつのまとまりとし、そのまとまりを以後“ターン”と表記する。
- 9 練習期間中の課題として学生たちは、毎週末、その週の練習を振り返り、レポートを福教授に提出していた。
- 10 筆者が学生 A に対して行ったインタビューより
- 11 練習場所として学生たちが使用していた、本学併設の施設名。
- 12 「紙コップ」とは、学生たちによるナビゲーションの練習方法のひとつである。紙に出力された作品画像を使用して、小規模での練習が進められる。通常は主に、プロジェクターを使用し、スライドに映し出された作品画像を囲む形で行われていたが、少人数で練習が行われたり、大学の機材であるプロジェクターを借りることができなかつたりなど、状況に応じて、この練習方法が採られていた。
- 13 筆者が学生 A に対して行ったインタビューより
- 14 『2008年度 ACOP・鑑賞者研究プロジェクト報告書』 p.89
- 15 『あなたへの社会構成主義』 p.111
- 16 同上 p.111
- 17 同上 p.111
- 18 同上 p.154
- 19 『2006年度 ACOP・鑑賞者研究プロジェクト報告書』 p.160
- 20 同上 p.128

▽参考文献

- T.トドロフ／大谷尚文訳『ミハイル・バフチン 対話の原理』2001 法政大学出版局
- M.バフチン／新谷敬三郎、伊藤一郎、佐々木寛訳『ミハイル・バフチン著作集⑥ ことば対話テキスト』1988 新時代社
- M.バフチン／佐々木寛訳『行為の哲学によせて』1999 水声社
- 柴田義松『ヴィゴツキー入門』2006 子どもの未来社
- ヴィゴツキー／柴田義松訳『新訳版 思考と言語』2001 新読書社
- ジャン・ピアジェ／滝沢武久訳『思考の心理学』1999 みすず書房
- K.J.ガーゲン／東村知子訳『あなたへの社会構成主義』2004 ナカニシヤ出版
- K.J.ガーゲン／永田素彦、深尾誠訳『社会構成主義の理論と実践—関係性が現実をつくる』2004 ナカニシヤ出版
- 上野千鶴子編『構築主義とは何か』2001 勁草書房
- 小森康永、野村直樹、野口裕二編『ナラティブ・セラピーの世界』1999 日本評論社
- 橋本満弘、石井敏編『コミュニケーション論入門』1993 桐原書店
- 林進編『コミュニケーション論』1988 有斐閣
- ウィリアム.S.ハウエル、久米昭元『感性のコミュニケーション』1992 大修館書店
- 串田秀也『相互行為秩序と会話分析—「話し手」と「共-成員性」をめぐる参加の組織化』2006 世界思想社
- 高原脩、林宅男、林礼子『プラグマティクスの展開』2002 勁草書房
- 小川英司『G.H.ミードの社会学』1997 いなほ書房
- G.H.ミード著／河村望訳『精神・自我・社会』1995 人間の科学社
- 久保田賢一『構成主義が投げかける新しい教育』
- 京都造形芸術大学『2006年度 ACOP・鑑賞者研究プロジェクト報告書』2007 京都造形芸術大学 芸術表現・アー

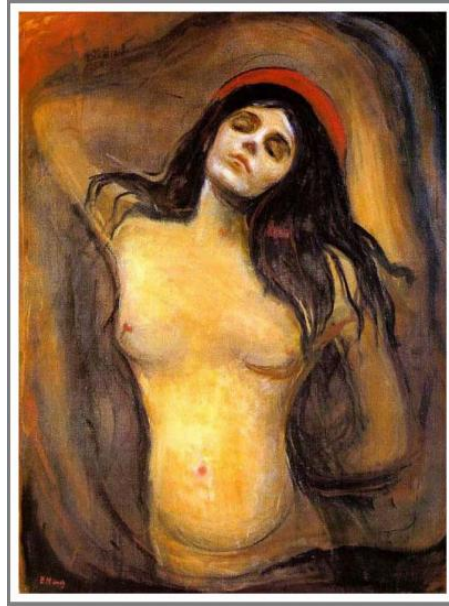
トプロデュース学科福のり子研究室

京都造形芸術大学 アート・コミュニケーション研究センター準備室『2007年度 ACOP・鑑賞者研究プロジェクト報告書』2008 京都造形芸術大学 アート・コミュニケーション研究センター準備室

京都造形芸術大学 アート・コミュニケーション研究センター『2008年度 ACOP・鑑賞者研究プロジェクト報告書』2009 京都造形芸術大学 アート・コミュニケーション研究センター

▽添付資料

《資料①》



N: 見てください。では、見えたこと、思ったこと、手を上げて短く教えてください。

A1: すごく、きれいな女の人だなと思いました。

N: はい、他の人は？

A2: 鏡に映っている女性、みたいな。

N: ん？どこが鏡ってこと？

A2: その、周りが。

N: あー、鏡のふちってこと？周りが。

A2: うん。

N: ふんふん。他はありますか？

A3: すごい、すごい妖艶な感じがして、すごく妖艶に背中を洗っている、

N: (笑) 妖艶に背中を洗ってる。

A3: なんか、こう、ごしごししてそうで。

まずナビゲーターは、セッションの導入となる言葉をかける

鑑賞者は、作品に描かれている要素や、それを見て気付いたこと、そこから想起されたイメージなどを語る

ナビゲーターは、鑑賞者により詳細に描写してもらうために、発言に対し問いかけをすることもある

確認のためのおうむ返し

A3 が、どこから妖艶さを感じたのか質問をしても良かった。おうむ返しに終わってしまっている

N:乾布摩擦？

A3:乾布摩擦。すごい、こう、淫らにというか。淫らに、背中を、、、

A4:洞窟な気がする。

N:あ、背景が、さっき鏡のふちとか言ってたけど、洞窟に見えてきた。

A4:洞窟で、なんかちょっと下が、水が（N:ふんぶん）張ってて、、

N:下ってというのはどこからですか？

A4:えっと足もとのところが、ちょうどお腹の、下腹部のところにちょっと、水の波紋のように僕には見えて、そのあたりまでは水があって、そこで水浴びをしてる。

N:あー、じゃあちょっと〈A3〉の背中を、、お風呂みたいなんと繋がんのかな。

A4:僕は水浴びじゃないけどね。もっとなんか、こう、誰も見ていないところで。

N:誰も見ていない。他はありますか？ない？じゃあ、まず背景も出たけど女性から見ていきましようか。どんな女性とか、もっと、見えることを教えてください。

A5:今女性っておっしゃいましたけど、確かに胸のところとか腰回りはすごい、、顔はちょっと男性にも見えるなど思いました。

N:今男性に見えるかも、私がちょっと女性って言い切ってしまったんですけども、男性女性、他、みなさんどう見えてます？

A6:イエス・キリストに見えます。

N:キリストに見える？ってことは男性で、、キリストに見える、、っていうのは、なんでキリストに見えた？

A6:んー、なんでやろ？あの、、磔刑に処せられたときの、、

N:あー。手が？

A6:手もそうで、そう連想させるのかもしれないけど、このなんか、死に顔じゃないけど、さっきなんか妖艶って言ったんが、死をちょっと感じさせる。

N:それはどこ？顔が、、

A6:顔色とか、、なんだろう、、微妙だな、、妖艶と死。

N:死、、全然違うよね。そしたら。キリスト、っていうのが男性、男性って言う風になってきたけど、みんな男性に見えてますか？他の人います？

A7:私は女性やと思うんですけど、なんかこう、儚い感じの、消えそうな顔してるなーと思いました。

N:なんか顔だけじゃなくって、手もね、さっき言ってくれたけど、消えそうっていうのも関係あるのかな？顔だけ？消えそうなのは。

A7:なんか、別に身体だけみたら、身体洗ってるようにしか見えへんから、なんか、顔がそうさしてるように見えるねん。

言葉の補足

再び、「淫ら（＝妖艶）」というキーワードが出た

「淫ら」というキーワードには触れずおうむ返し

問いかけ

先ほどの〈A3〉の発言（「洗っている」）と〈A4〉の発言（「水浴び」）が共通していることを示す

〈A4〉の発言の本質は、「ひっそりとした印象を受けた」という点であった。ナビゲーターは表面的な共通点（「洗っている」「水浴び」）を挙げるに止まっている

鑑賞者の視点を絞るために、描かれている要素を人物、背景などに分け、順番に見ていくことを促す（提案／要求）

視点を絞る（提案／要求）

問いかけ

言葉の補足

問いかけ

「キリスト」というワードから「男性である」という要素を取り出した

〈A6〉の意見と繋げる問いかけ（やや操作的な印象を受ける）

N:んー。顔のどこらへんがそうさせてる？	問いかけ
A7:なんか、あごが上がってて、で、まぶたがほとんど閉じてるような感じ。	
N:なるほど。	相づち
A8:私も女の人やと思うんですけど、やっぱりその一、髪の毛も黒くて長いっていうので、結構、なんか、アジアンビューティーとか、(一同:ああ〜!)なんかそんな人をイメージして。	
N:CMとかもそんなCMやんね。黒髪の、なんか	具体的な内容を補足することで、〈A8〉の中のイメージを捉えようとしている
A8:そうそう。なんかシャンプーとかのCMに、まあ、この人はちょっと、雰囲気的には違う感じやけど、すごくきれいな女性やなって、やっぱりずっと思ってて。思ってます。	
N:ふーん、きれいな。	おうむ返し
A9:今のシャンプーのCMって聞いて、髪も濡れてるしなあ、と思いました。	
N:あー、そうですね。湿り気も感じれますよね。ここに。	言い換え
A10:しっとりしてるよね。	
N:ふんふん。なるほど。	相づち
A9:って言えば良いのに、って思って。	
N:ああ〜！	
A9:濡れてますよね。濡れてる感じがしますよねって。	
N:そっか。そうですね。さっき、〈A5〉が水気を感じてくれてて、髪も湿ってて。そこが共通してますよね。えっと、、これは男性か女性かっていうのが、、、	
A11:はい、えっと男性じゃなくて女性です。胸があるし、身体を見ててもなんかすごいきれいな感じの、「女性らしい」身体。	
N:それは胸だけじゃなくて、身体？	問いかけ
A11:そう。身体つきもそう。で、なんかお腹のへんも、なんか、、	
N:どうなってます？	話し終わる前に言葉を挟む
A11:ふくらん、、、なんて言ったらいいんだろう、、妊娠中じゃないけど、そう、丸みを帯びているような。	
N:ふんふん、なるほど。えっと、一応そう、今言ってもらったんですけどこれは女性です。で、今言ってくれたのが、お腹がふく、、、いや、ちょっと待って。ふっくらしてて、妊娠とかいう風に言ってもらって。んー、もうちょっと、では、見よか、、、	男性に見えたという鑑賞者の意見、それはどこからか、といった点を無視してしまっている。答え合わせ的な印象を受ける 「男性にも見える」という意見の根拠が共有できていないことが発覚
A12:その前に、そもそも〈A5〉が男だと思う、顔からって言ったけど、顔からって言われてもなんで男なのか、オレには分からない。	
N:うーん、うーん。挑戦的なんやろな、って思って、なんか聞いて欲しいんかなって思ってしまって、、、	〈A12〉の発言内容に対する応答ではなく、ナビゲーター自身の行動に対する反省
A13:でもすぐ西田の方にいったじゃん。	
N:なんで？って聞かなあかんねんよな。じゃあ、男性女性っていう風に感じられたという、顔からまず見ていきましようか。えっと、どんな顔とか。	視点を絞る(提案/要求)
A13:先ほど、僕、男性って言ったんですけど、理由考えてて、ちょっとこう、あご、あごから頬にかけてのラインが割とあの一、骨張ってる。あと、結構ホリの深	

い顔してるなって。目も凹んでるし、鼻は逆にずっと高いし、、マイケル・ジャクソン。

N: (笑) またちょっと違う、男性っぽい、(A5)には男性っぽく見えてるからマイケル・ジャクソン、、、ハッキリしてるので、そういう風に見えてくるんですね。

A13:何か、無理してこう白く見せてるみたいなの。

N:あー。マイケルですね。そっかー。白く見せてる、、ふんふん。

おうむ返し+相づち

A14:あ、ほんまや。マイケル、、、笑

N:マイケル、、、女性ですよー。

A15:顔は、さっき死を感じるって言った(N:言ってくれた。)のは、なんか骸骨に見えるから。

N:は一。そうか。

相づち

A15:なんか、このへんが、

N:ホリが深いって言ってたけども。

話し終える前に言葉を挟む

A15:目がくぼんでるとか、そういうところで骸骨に見えて、ちょっとなんか、温度があんまり感じられへん。なんか、白いとか言ってたし(N:うんうん、顔だけ白いって、、)、なんかそんな感じがする。ちょっとつめ、、冷たいっていうか。そう、、なんやろ、、そうですね。

話し終える前に言葉を挟む

N:凹んでるってだけじゃなくて、そこから骸骨とか死とかを連想してくれたんやけど、みなさんどう思いますか？

〈A15〉の発言内容を要約

A16:そうするとなんか、さっきの身体がふっくらしている感じの、すごい生気に満ちあふれた感じと、上と、首から上のギャップがひどい、ひどいというかすごいな、と。

N:ふんふんふんふん。どうすごい、、どうすごいとかおかしいよね、、えーっと、、

相づち+ひとり喋り

A17:えっと、なんか顔、、首から上の顔と、首から下の身体、で、首から下、なんかさっきすごい生気があるとか言って、すごいあったかい感じがするんですけど、なんかその、色的にも。

N:確かに顔は温度が冷たいって、、

A17:特にその一、妊娠とかっていう話が出てきて、お腹の周りがすごく明るく描かれてて、すごく、、なんだろう、、妊娠してるかどうかかわかんないけど、いったら女性の象徴みたいなものを感じるから、すごくそこはあったかく感じる。だから、でもその分、首から上、顔の部分って、すごい、みんな言ってくれたみたいに白い、白かったりするから、んー、、なんなんだろう、この差は。この温度差は何なんだろう。

N:うわー、なんだろう、これ。ちょっと待って。石川くんの言ってることを読まないとー。えーっと、、ごめんなさい。んーっと、、

ひとり喋り

A17:なんか、ひとりの人から、すごくあたたかい部分と、すごく冷たい部分が。

N:あー、そうやって今、普通に返したらいいんだよね。そっかー。

ひとり喋り

A18:石川さー、この胸に抱かれますか？

A19:えー、首から下になら。

N: (笑) 首から下はあったかくて、それだったら石川くんもいいよって。(笑) なるほど。顔、この顔が、冷たい顔、、

おうむ返し+相づち+ひとり喋り

A20:女性に抱かれない、、おもしろい、「抱かれない」。

A21:「抱かれない」だったら「抱きたい」じゃない？

N:あー。	相づち
A22:それは女性にある種の包容感があるってこと？包容力がある、、、	
A19:そういう母性的なものを感じる。	
N:は一、なるほど。そういうことかー。	相づち
A22:だからわざわざ首から下って言ったのか。	
N:その、首から下ってというのは、女性的な部分が強調されていて、母性を感じる。さっき妊娠してるのかな？っていうのも出てきてたけど。	先に出た意見の繰り返しに終わっている
A19:なんか、すごく幸せなことだったり。	
A23:だからあったかいんだ。	
A24:それを聞いたら、すごいなんかこう、、、顔ってひとりひとり違うじゃないですか？でなんか、そういうことじゃなくて、「女の人」っていう部分に関しては、すごい、こう、生気があるし、あったかさを感じるし、なんか、、魅力を感じるんだけど、この人自身も、その「女として」の存在にはすごい魅力があるんだけど、この人自身のなんか、こう側面であるとか、考えていることとかってことに関して、恐ろしさをすごい、恐ろしさっていうか、死の匂いだとかそういうことを感じるんだよね。	
N:ちょっと待って、、、すごい、、あー！もう！どうしたらいいのー。もうちょっと詳しくお願いします。	ひとり喋り
A24:そうだね、この人は多分、多分じゃないな、女性だと思うので、女性という意味ではすごく惹かれるし、女性的なパーツも、もちろんすごい持ってるわけなんだけど、でもその人自身にはすごい破滅的な感じとかを、があるのかなっていうことを、そのギャップから感じました。	
N:なるほど。えっと、、、みなさんわかりましたか？っていうのを聞かなね。私だけ分かってても意味ないね。みなさんどうですか？もうちょっと詳しく聞きたい？私が言い直したら良いんか、、、破滅的ってなんですか？	ひとり喋り
A25:それはさっきの「死」っていうこと？	
A24:うん、を想像して、なんかこう、なんだろう、、胸だとかお腹とかは、何かをこう育ててくれるみたいな、そういうようなあったかさを感じるんだけど、顔の方から、あ、そういうパーツも持ってるんだけど、顔っていう、この人個人が出る部分に関しては、すごい、そうではない、マイナスの、ネガティブなものが出てくるのかなあ、っていうね。	
A26:この女性自身の内部とかが、その、持っている破滅的な要素というよりは、これ、まあ多分男性かな？見た側が、そういう破滅、、てか何やろう、、さっき喋って言ったけど、そういう風にして、させられている感じがする。この人自身じゃなくて、見る、見る人、、ああ〜わからん、その相手から、相手からさせられる、、、とかさっきみたいやけど、こういう風な、死を、死を、死を？、、、マイナスイメージを科されている、みたいな。	
N:ふーん、じゃあ、この人自身が持っている部分もあるかもしれないけども、見てる人とか、描いた人っていうのが、ここにさらに、それをプラスで、、、	要約
A26:この人、この女性自身は、持ってない気がする。あ、持ってるかもしれないけど、、、私は持ってないと思うんですね。	
A27:それはどこから？	
N:あー、ごめんなさい。プッシュ（問いかけ）がないよね。どこからですか？	問いかけ
A26:私はこの女性の顔とかに、そういう生気はむしろ感じて、すごく恍惚の顔をしている、、	
N:そう、誘惑って言ってくれてたよねー	言葉の補足
A26:そう、すごい、だからこの女性自身において、そんなんを、、、あー、、感覚的	

な話になっちゃうね。なんて言うんやろう。だから、その、言ってみればこの女性自身はすごい光っているように見えるんですよ。で、むしろこの周りのもやもやの暗い部分っていうのは、女性自身の持つてるものじゃなくて、その、相手の気持ちだったり、っていうのは、女性自身を感じるから、この女性自身には、そういう負のイメージだったりマイナス要素、破滅的な要素はなくて、もう全部、周りから受けた、受けたっていうか、そういう風に、(N:周りが感じてる?) 感じている、、

話し終わる前に、言葉を挟む。

N:ものが表れてたり、っていうの。○○くんどうですか？

話し終わる前に、言葉を挟む

A28:んー、なんかその、なんだろう、さっき身体の部分はすごい女性らしくて、あったかくなっていう話したんだけど、その、表情によって、わざと、その自分の中にある、そういう女性的な部分を、表情で出さないように、抑えてるっていうか、例えば、誰がこれを見てるかっていう、その状況はわかんないけど、今日の前で作家さんが描いてるんだと思うけど、その作家さんには、その、そういうところを見せたくない。

N:ほー。見せたくないけど、石川くんはでも感じてくれたんやんね？顔は冷たいとかみんな言ってくれて、、ちょっと待って、、んーっと、、そっか、、

ひとり喋り

A28:無理矢理、押さえつけてる感じがする。

N:その女性が、そういう風にして、っていう風にしてるってこと？あ、違うわ。押さえつけられてるっていうのは、そんな風に感情を出さないようにしなければいけない、、

A28:んー無理してる感じがする。

N:なんで、なんで無理してるんだろう。

問いかけ

A29:どっちが？

A28:女性が無理させられてる、、

A29:女性が無理して、この顔に出さないように、表情に出さないようにしてる？

A28:女性が無理してる。

A29:女性が無理してるんだね。

A28:無理してる、、(N:本当はじゃあ、、) 本当はもっと、、

話し終わる前に言葉を挟む

N:身体と見合ったような、あったかい、、

話し終わる前に言葉を挟む

A28:、、表情の持ち主なのかも、、

N:かもしれないね。そうですね。かもしれないしね。

相づち

A30:私は、この人は自分に陶醉してるんやと思う。(一同:はーあ。) だから、さっきも鏡とか言ったし、(N:そうやね。) なんか、こう、自分にすごい自信があって、で、顔も、、なんだろう、妖艶な感じやし、、出してるんだと私は思う。抑えてるんではなくて、出して、、

N:そうなんよね。じゃあ〈A28〉は、言ってくれたんは、抑え込んで、どちらかという魅力を出さないようにしてるんやんね？でも、今言ってくれたんは、自分がちゃんと気付いてるし、外にも出して、魅惑、、あ、誘惑とか言ってくれたね、一番最初、だからそれも醸し出してるんじゃないかっていう風に、ふたつとも出てきたけど、それって両方あるよねーっていうのがいいのか、、

出てきた意見の相違点をあげ、対比を明確にしようとしている。

ひとり喋り気味

A28:押さえつけてるっていうか、自分の魅力には気付いてるとは思う。

N:あー、そっか。

相づち

A28:ただ、表情によって、目の前にいる人に見せたくはない。

N:ないっていう風にもとれるし、どっか陶醉してるっていうのは、、、えー、、、

ひとり喋り

A31:なんか聞いてて、女性なのは同じやと思ってて、ただ、母としての女性と、女性、、女としての女性が混在していて、それが僕にはすごく、、どっちも女性なので、

N:そうですね。

A31:そのふたつのどちらともとれる、その、女性の二面性が、僕としては、こう、気持ち悪いっていうか、よくわからないっていう感じがします。笑

N:あー。今言ってくれたのは、みなさん分かりましたかね？今両方、なんやろ、温度が顔から上は冷たっていうの出てきたし、身体は妊娠してるんじゃないかとか、女性の部分をすごく強調してるから、あつかいんじゃないかとか、顔が死んでるとかも出てきたし、それで、誘惑、陶酔とか、そういう魅力に気付いてるんじゃないかなーとか、ていうのが出てきたのは、やっぱり女性やから、両方、ある、、、母、母としての女性、女としての女性っていうのも両方あるので、ふたつとも感じられるのかなあ、という風に思えてきました。

A32:、、、んー。その差？死と生、、、あたたかいのと淋しいっていうか、その、顔の生気がないっていうところから、母と女性っていうのは感じられない、繋がらないかなーって。

A33:今のやったら、妊娠してるとか、っていうのはすごく女性的で、やし、さっきも女性的に描かれて、女性の強調されてるってところは確かにそれがすごくあるだろうし、その、顔は恍惚の表情、それは何か誘惑するかのような恍惚な表情を浮かべているっていう点において、女性、、母性、、母としての女性と、女としての女性を両方。うん。

N:そっか。汲み取れてない。ごめん。

A34:私は相変わらず、この人の顔は死んでるように見えてて、それこそ胸とかお腹とか、女性らしいっていう、一般的な女性の部分は強調されてるのに、その顔っていう個人のものであるものが強調されてない。その、例えばその、、例えば、ニッチらしい女性像、〈N〉らしい女性らしさみたいなん？その、女性らしさって人によって違うと思うのに、その個性の部分が消されてるような感じが。

N:例えばどこが消されてる？

A34:なんか、顔が、こう、、白くてその一、、なんかどっちかっていうと、胸とかお腹がぼんって、こう、印象として出てるから、その一、一般的な女性像っていうか、その女性の部分を、ぼんって出してる感じがして、私はすごく嫌やなっていう感じがします。

N:えーっと、じゃあ〈A34〉は、女性の象徴はすごく強く感じるって言ったよね？

A34:で、なんか〈N〉個性がつぶれてて、、、んーっと、、、私がさっきからちょっと思ってたんは、なんで、この顔が恍惚の表情なんかっていうのが、ちょっと疑問に思ってた。

N:そっか、置いてけぼりになってたんか。

A34:うん。それがあって、そんで私はずーっと死んだ顔で、、（聞き取り不能）やったから。

N:そっか、、、そうだね、なんで恍惚やと思ったんかっていうのも両方聞かなダメなんだよね。え、〈A34〉、ちなみになんで「死」やと思ってんの？

A34:なんか、私にとってはこの人は、平面、、みんなはこうやって見てるんかもしれへんけど、私はなんか、容れ物に入って、こうやって、置かれてる状態を想像してしまっただから、棺桶の中で、写真みたいな、そういうイメージがあったから、、、

N:なるほどなるほど。じゃあ、恍惚やと思った人は、なんで恍惚やと思ったんかな？

A35:目が、すごく安らか、安らかっていうか穏やかな感じ。眉毛も下がっていて、口もきゅっと上がっていて、そこにもし死んでるんやったら、それがすごい自然な状態のはずなんやけど、これは自然じゃなくって、なんやろ、作られている自然というか。なんやろ、意味分らん？それって、意識的なんか。でも意識的っていうより、無意識にできてしまった表情？

相づち

先に出てきた意見を羅列するが、矛盾を孕んでいる。そのことから、ナビゲーター自身の中で、それまでの話の流れや内容をうまく処理できていない状態が伺える。

問いかけ

話し終わる前に言葉を挟む

ひとり喋り
問いかけ

問いかけ

N:それってでもね、死んだ時にする力の抜けた表情と一緒にったりしない？それって、、。自然にしているやんね？あえて作ってないやんね？

ナビゲーター自身の意見

A35:んー、、一緒やねんけど、そこに何か理由があったの事とかいうか、やっぱり目は、すごいうっとり、うっとり、、なんか、、、なんて言えば、、

N:目をつぶってて、口が閉じられててっていうのは、そっから〈A34〉は死を感じてくれたわけやし、〈A35〉もこっちな？そういう誘惑とか、、恍惚な表情？

A36:なんで恍惚かなーって今考えてて、すごく、濡れてるのか、肌はまた汗ばんでいるのか、(N:は一は一、なるほど。)なんか濡れるっていうのは、僕としたらなんかこう、なんか、「水も滴る良い女」とかいう表現もあるけど、こう、なにかこう、なんか性的な感じが受ける。濡れている、っていう、濡れ場みたいな。

A37:ごめん、もっかい言って。

A36:なんか濡れているっていうのは、その、性的な感じがして、「水も滴る良い女」じゃないけど、(A38:「良い男」じゃない?)「良い男」か(笑)。どっちでもいいんだけど、すごく、その、汗ばんでいるようにも見えるし、あとは濡れてるようにも見えるんで、、(A39:セクシーや!)そうそう、セクシーな感じがすごくする。

N:は一ん、そこからね、セクシーが連想してきたんやね。

おうむ返し

A36:安らか、、確かに安らかだし、目も閉じてるんやけど、それはもしかしたら水浴びをしてて、もしかしたら気持ちいいなっていう時の顔かもしれない。

A40:わかった！なんで死と、そういう恍惚とかが繋がるんかなって思って考えてたら、その、全部そういう時って、魂がこころ辺抜けてる感じがするから。

一同:あー！！なるほどー。

A41:やっぱり、無意識なんや。

N:ちょっと待って、なんて言ったらいいの？こーいう時、、ねー、そうだよー、じゃあかんよ。わかってるんやけどー！わかってないなー、、、ごめん。

ひとり喋り

A42:全然関連してないけどいい？なんか、セクシーとかいう話してたやん？なんで陰部が描かれてないんだらうって思って、

N:なるほど、見えてないよね。

相づち

A42:うん。で、その一、あんだけおへそからお腹がこう、下までいったら、陰部見えると思うんやけど、それ隠されてるやん？で、なんかこう、掴んでるようにも見えるんやけど、その周りにぶあーって繋がって行って、それが陰部に見えてきちゃったの。

一同:おおー！！

N:みんな思った？今の。描かれてないんじゃないかって、ここがそういう表現なんだ。(ザワザワ)

A42:で、子どもが、子どもは頭から出てくるから、また状況は違うのかもしれないけど、女性から女性が生まれるっていうのを想像したら、なんかな、女性から女性がずっと生まれてきたらな、男性いなくなるやん？(一同:ザワザワ)すごい難しいんだけど、この話。そういう連続があったら、なんか連続する感じってグルグルする感じもしてるやん？そしたら、、でも男がいなければ、生まれない。

A43:無精生殖とか、、

N:ええー！でもここには男性描かれてないし、、

A42:なんか、その不思議な、その、死とかいう話もしてたけど、、(聞き取り不能)

N:だから単なるセクシーじゃなくなって、妊娠を一、、ちやうわ。ちょっと待って、女性から女性が生まれて、どんどんどんどん、でもここに男性が描かれてないし、

ナビゲーター自身の意見

なんか怖いねー。

A44:女性から女性が生まれるのは普通にあると思います。ここにいる女性もみんな女性から生まれたんで。

N:そうだよねー。なに言ってんだろー。すいません。

相づち+ひとり喋り

A42:そういうグルグルしてる感じが、、、をイメージ、、、(聞き取り不能)

A44:この女の人が妊娠してそうっていう、、、を使わないと、うん、お腹の中にいるときから妊娠してるって風にならなかったら、別に男が入る余地はいくらでもあるので。

N:あ、そっか。描かれてないだけで。

A44:いや、さっきふっくらしてるってさ、妊娠してるかもっていう感じが出てたわけだけど、この人が、子宮の中にもしいたとしても、別にそれは男性との間に生まれたかもしれないけど、この人が妊娠した状態で、妊娠した人のお腹の中にいるとしたら、男の人が入る余地はないよねっていう。

N:あー。それだったら、女性が、女性だけで生まれていくっていうのが考えられるけど、

A44:だから、女の人が子宮の中にいること自体は、みんな、、、

N:そうですね。私、ちょっとあれだった、さおりちゃんのことをちゃんと理解できてなかった。ごめん。私が理解してなかった。なんかね、ちょっと、、、うん。そうだね、そういうことだったんだね。前も出たのに出来ないなんて最悪だよ、私、、、、ん？なんてなんて？

ひとり喋り

A45:男が、入る余地がなかったら、ある種の恐怖。入れないんだもん。触れられないってことでしょ。

N:触れられない、、、は一、ちょっと待って。要るよそれ。すごく重要。それなんで聞けないんだろう、自分から。そう聞いたら、みなさんどんな風に感じましたか？

ひとり喋り

A46:「男性が入る余地がない」ってなら、男性の人はどう思いますか、って。聞いても良いんじゃないかな。

N:そうだね。じゃあ聞いても良い？男性の方、そんなことを聞いて、どんな風に感じますかー？女性だけで、どんどんどん生まれていくっていうの、男性の入る余地がないとか、ちょっと壁を感じるとか言ってくれたけれども。

A47:えっと、でも、無精生殖とかあるじゃん。ミジンコとかさ、メスだけで繁殖するじゃん。オスが異常みたいな。異常な時だけオスが出るみたいな。もともとそういうものかなーとか思ったりして。男の存在なんて結構、、、子どもを作るためだけにいるオスみたいな。女王蜂だってそう。(一同:は一ん。)そういう感じの。作者が男とかそういう話出た？

N:全然出てません。ごめんね。そうだよ。でも今のタイミング、どこだったのかわかんない。どっちみち。

A47:いや、なんか、そういう話が出てたんだったら、そういう話に繋いでくかなーって思ってる。

N:してないんだ。

A47:まあ、それはそれとして。そういう、、神秘的じゃないけど、女性崇拝的な感じがして、ある意味、すごくこう性の対象として見るよりも、むしろこう、近づけないものというか、自分が排除されて近づけないもの、みたいな。

A48:オレも実はそう思った。

N:なるほど。なるほどー。女性崇拝。近よれない感じ。北村さんはどう思います？

相づち+おうむ返し

A49:男性の入ってる余地がないっていうのは、僕もそう思う。男性的な部分であるとか、まあ男性に象徴される攻撃的な部分とか、そういうのはすごく、感じない。こんなにも、無防備にこの女性は、肌を、胸を晒しているのに、こちらはすごく犯

しがたいものを感じるし、でも、この、男性の入る余地がないって言ったこの絵の、
てっぺんから下まで描いたの男性でしょ？っていうのはすごく大きい、

N:あー。

相づち

A49:これ 100 パーセント男性が描いたもんでしょ？っていうのが。と思う。これは
女性は描かないだろうという。

N:ほー、なんで描かないの？

問いかけ

A49:ここまで、客観視出来ないと思う。

N:女性が女性を描いた時？

言葉の補足

A49:うん。(男性一同:うん、うん。)

N:どこが客観視なのか、私よくわかんない。

ナビゲーター自身の意見

A49:今、〈A44〉も言った、女性が女性を生んでいる。それだけなら全然変では
ないねん。それをさらに、妊娠しているっていう姿と重ね合わせて、つまり、女性
っていう部分と、女としての女性っていう部分と、母としての女性っていう部分の
二面性を、二面をどっちも真正面から捉えて、で、それをカンヴァスに、どちらも
残したまま描き込むっていう作業で、はてさて、自分も女性のひとりとしての人が
やれるものなのかな？っていう。これは男性のエゴです。

N:あー。そんなん言われたら女子どう？、、、こういう時、作家を言うべきなんかな？
ややこしい？もっと話すべき？(A:やっちゃいなよ。)(A49)が、今すごく
言ってくれたみたいに、この描いてる画家は男性で、ムンク、エドワード・ムンク。
で、〈A49〉が言ってくれたように、女性の二面性、みたいなんを両方、多分なん
か感じて描いたのかな、、、こんなん言ったら終わっちゃうね、話す余地ないよ
ねー。ごめん、どうしよう。画家は男性です、ぐらいの方がいい？それを聞いたら
みなさん、どう思いますか？男性が描いてるっていう風に聞いたら、、、

ひとり喋り

A50:題名とか。題名違う？題名。

N:題名、、今言ってなんか、、

A51:今、まとめる要素は自分的には揃ってると思う？

N:あると思う。全然揃っとる。揃っとるよね。てか、今さー、言ってることがさ
ー、、、なんか「です。」って言って、、、笑 えっと、どうしよ。

ひとり喋り

A52:タイトルを一応、、言っていないでしょ、まだ。

N:言ってます。

A52:言っても良いんちゃう。

N:そっか。男性が女性を見て描いたということで、タイトルは「マドンナ」って
います。

情報の提示

一同:ほーう。

N:タイトル聞いて、どう思いましたか？

A53:ついこの間、私先生の本読んで、何やったけ？「...」っていうのを読んで、
マドンナ=女神っていうのは知っちゃったから、わあー！とか思って。

A54:余計震え上がる、、、

A53:すげーとか思って。

N:女神、えっと、マリア、聖母っていう意味なんです。「マドンナ」。他の方どう
思いましたか？

情報の提示

A55:そう思うと、余計触れられないし、ある意味超越的な存在であるっていうの
はあるし、その、聖母ってことは、神様がそこに宿したから、そこに男性いないっ
ていう、、、何だろう、、

N:処女受胎。

言葉の補足

A55:処女受胎？だから、、、

N:さっき言ったのが、みんな絵から感じてた、、、

A56:そんで、マドンナって聞いたたら、さっきから触れられないとか、すごいなんか神秘的なものみたいな感じになってるけど、マドンナっていうと、僕のイメージなんだけど、なんか、歌手のマドンナ。シンボルとか、そういうことも感じるの、そんなに神々しいだけではない、すごい具体的な存在というか、

N:うんうん、なんか、、、

話し終わる前に言葉を挟む

A56:セクシャルな存在だなあというように。

N:そうですねー。その、なんか母性っていうのもすごい出てきて、その女神っていうのもみんな感じれるけど、最初の、やっぱり恍惚の表情とか、なんだろう、女としての女性性も感じるって言うてくれたから、そういう、今みんなが感じてる「マドンナ」っていうのも、伊達さんが言うてくれたようにはまるのかな、って思います。思いますって言い切ったらだめだよな。

それまでの意見を総括し、〈A56〉の意見に繋げようとする

ひとり喋り

A57:マドンナ＝女神とか、その、マドンナっていうテーマを聞いて、さっきからこの、女性崇拜とかいう言葉が出てきてたんですけど、(N:そうですね。)でも、崇拜しているというよりは、その周りの暗さだったり、その、崇拜して、近づけないっていう思いもあったんだろうけど、それと同時に、女性に対するなんかちょっとネガティブな気持ち、、、

相づち

N:例えばどんな気持ち？

問いかけ

A57:不安だったり、裏切られた、、その、なん？トラウマだったり、女性に対する怖さも感じてたんじゃないかな、っていう。

N:崇拜だけじゃない、女性の怖さ。うんうん。確かに周り暗いですね。伊藤くんはどう？

おうむ返し

A58:だいたい同じようなことで、聖母っていう、あの一、むしろこの絵で描かれているような、こう、、女の人の艶かしさと母性みたいな、そういうのを、こう、マドンナっていう、なんだろうな、、ごめんまとめてなかったからいいや。

N:崇拜、、、

A58:崇拜。そう、聖的な崇拜じゃなくて、聖の、聖の崇拜、、そういう崇拜じゃなくて、もっと単純に、それこそマドンナ的な、セックスシンボルとしての崇拜、みたいにも、どっちにもとれるような。

N:そうそう、両方、、、、(聞き取り不能)これは、まとめれるよねー。単に、最初は、えっと、、、合っていないのかも知らない、、、ずっと出て、、、両方、、、女性、、母、、母としての女性、女としての女性、二面性もあって、そこから、えと周りが、周りが、こう、もやもやしているところが、不安とか怖いとか、女性に対してそう思ってたんじゃないかなーって言うてくれたんだけれど、これはムンクの好きだった人、なんだけれど、彼女にはできなかったっていうのがあって、なので、どこか、あとトラウマっていうのも言うてくれてたんだけど、ムンクは母を亡くす、、母と姉が小さい時に死んでいて、女性に対するその、トラウマだったり、不安だったりっていうのがあったんです、ね。なので、それがここからも、ただただきれいな女性っていうのじゃなくて、不安、、、最後しか出てないのにな、そんなこと言っちゃだめなの、、そういうのも両面感じていたのかな、、としました。

ひとり喋り気味

【作品】
「マドンナ」
エドヴァルド・ムンクノ
1894-1895

《資料②》

A5:今女性っておっしゃいましたけど、確かに胸のところとか腰回りはすごい、顔はちょっと男性にも見えるなと思いました。

N:今男性に見えるかも、私がちょっと女性って言い切ってしまったんですけども、男性女性、他、みなさんどう見えます？

↓ (以上のようなやり取りがあった後に)

A12:その前に、そもそも〈A5〉が男だと思う、顔からって言ったけど、顔からって言われてもなんで男なのか、オレには分からない。

A26:私はこの女性の顔とかに、そういう生気はむしろ感じて、すごく恍惚の顔をしている、、
N:そう、誘惑って言うてくれてたよねー
↓ (以上のようなやり取りがあった後に)
A34:で、なんか (N:個性がつぶれてて、、、んーっつと、、、) 私がさっきからちょっと思ってたんは、なんで、この顔が恍惚の表情なんかかっていうのが、ちょっと疑問に思ってる。

《資料③》

A16:そうするとなんか、さっきの身体がふっくらしている感じの、すごい生気に満ちあふれた感じと、上と、首から上とのギャップがひどい、ひどいとかすごいな、と。
N:ふんふんふんふん。どうすごい、“どうすごい”とかおかしいよね、、、えーつと、、、
A17:えっと、なんか顔、、首から上の顔と、首から下の身体、で、首から下、なんかさっきすごい生気があるとか言ってる、すごいあったかい感じがするんですけど、なんかその、色的にも。
N:確かに顔は温度が冷たいって、、、
A17:特にその一、妊娠とかっていう話が出てきて、お腹の周りがすごく明るく描かれてて、すごく、、なんだろう、、妊娠をしてるかどうかわかんないけど、いったら女性の象徴みたいなものを感じるから、すごくそこはあったかく感じる。だから、でもその分、首から上、顔の部分って、すごい、みんな言うてくれたみたいに白い、白かったりするから、んー、、、なんなんだろう、この差は。この温度差は何なんだろう。
N:うわー、なんだろう、これ。ちょっと待って。〈A17〉の言ってることを読まないでー。えーつと、、、ごめんない。んーつと、、、
A17:なんか、ひとりの人から、すごくあたたかい部分と、すごく冷たい部分。
N:あー、そうやって今、普通に返したらいいんだよね。そっかー。

《資料④》

A9:とても、見下されているような感じがします。
N:お?なんで?どこからですか?
A9:なんか、顔の角度とか目線とかが、顔上にむけて、こう見下ろされてる感じがするから、なんか、すいませんって感じで。
N:謝っちゃうような?笑 他には何かありますか?みんな、見下されてるだけ?
A10:私は見下されてるっていうよりは、女の人はずっと胸を張って、ポーズを決めているだけなような気がしました。
N:ふんふん、えーつと、「だけ」ってことは、〈A10〉さん何にも感じないってこと?
A10:だけ、っていうか、見下すっていうかは、「私を見て」とかそういう、マイナスではなくプラス形な感じの方があつたかな、って。
A12:...私は、男性を誘っているように見えます。
N:ほうほうほう。てことは〈A11〉とはちょっと話がかわってくる。誘ってるのはどこらへんから感じる?
A12:やっぱり、こう、、ポーズから?で、すごい顔もーなんやろな?
N:さっきは威嚇やったね。
A12:うーん、、なんかすごい妖艶な感じがするから、その周りのゆらゆらも、その、、誘惑のダンスみたいな。
N:誘惑のダンス!!笑 なるほど、〈A12〉には誘惑のダンスに見えてきたぞ、と。じゃあ、顔も、ちょっと表情が違ってくるのかな?他の人どうです?そういうの聞いたら。
A13:私も、同じ感じで、どちらかという男性を魅惑、、魅了している感じで、なんかその雰囲気はぼわーんって。

N:周りの。
A13:周りに出て、すごい、こう、オーラみたいに出てる感じで、なんか魚眼レンズとかで見たみたい。
N:あー、真ん中だけこう大きく見える...
A13:そう、で、それで、なんか身体とかも結構強調されてて、なんか、、、魅惑?誘惑?
N:今男性を誘惑って言ったよね?
A13:うん、、男性っていうか、、「見て」って。
N:誘惑っていうのが強くなったよー。

《資料⑤》

A26:何かしらに、こう、飲み込まれてるとか、そういう風に言ってくれたと思うけど、そういう感じで、曖昧としてて、こう、、そこまで想、、、妄想しきれなかったみたい。
N:その妄想って、ネガティブな言い方なんか?
A26:なんか、気持ち悪さを感じる。
N:あ、気持ち悪さ感じる。

《資料⑥》

A9:メデュースっていう、、、この人、目つぶってるじゃないですか。この人もしかして目あけたら、その、見られた人は、固まってしまいそう、、
N:は一、そこから何を感じてくれたんですか?んー、、そうですよねーじゃなっくって、、、んーつと、、、んー、、、

そこからじゃなくて、目つぶってるからやし、えっと、、、 そうなったら怖いですね、とかそういう、、、 怖いんですね、って返して良いんか、、 うーん、、、
A10:なんであかんの？なんで迷うの？
N:他の人がどう思ってるか分からんから、、、。えー、じゃあ、それを聞いたら私、すごく怖くなってきたんですが、 他の方はどう思われますか？

《資料⑦》

A15:えっと、近寄りたいたい感じもすごいするんだけど、一方で、なんて言うかな、生々しいというか、すごく手の届きそうなどころにあるような、エロさというか、そういうものもすごく、、、 魅力とか、魅惑とかみたいな感じで。それはすごく身体つきとかもそうだし、、、 うん。胸もすごく張ってて大きいし、で、それをなんか (A:突き出してんねん) そう、突き出して、見せつけられてる感じがして、寄って来いと呼ばれてる感じもするんだけど、一方で近づけない感じと両方の間に、、、 かなって。
N:あー、魅力をすごく見せつけられてるから、吸い込ま、、、 近づきたい感じもするんですけど、さっきジョージも言ってくれたように、言ってくれたように、なのになんか、えっと美しすぎて、それが、壁、、壁というか、近寄りたいたい雰囲気も両方見えてきましたね。えーと、もどかしくなって、んーと壁ができるのかな？えっと、なんだろう、、、 そうなったら、、 でもよく見ようとする、、、 違うか。なんか、見入っちゃうから。
A16:なんか、葛藤もあるし、こんだけ、見せびらかすってことは、この人自身が、、、 (聞き取り不能) やし、なんかそういう、触れられないっていうのは、自分になんか、劣等感すら抱かせるような、自信があるからやと、、
N:その自信があるっていうのは、どこから感じてくれました？
N16:身体を、誘惑するとかいうのもそうやし、見せびらかせられるっていうのは、自信があるからかな、って。
N:その自信があることから、こちらが劣等感、、、 あー、同じこと言ってるな、、、 んー、、、 こちらが、すごく劣等感を抱く程、この女性は魅力的っていう風に、、、 んー、魅力的なのは知ってるしな、、、 んー、、、
A17:でも、ちょっと話がずれちゃったりするんやけど、髪の毛が、クモの足って言って、それが私には、クモって結構、クモの巣あって、そこに虫とか、、、 罨みたいな感じで、寄せ付けて、じわじわと食べる、、、 最後喰っていくっていう感じ、、、 を思い出して、そしたらこの女の人は自分の身体が、クモだったら巣って感じで、男の人がそれに寄せ付けられて寄ってきて、でも近づけない、近づきたいけど近づけない、その、なんか、苦悩が、、、 とか、、、 (聞き取り不能) とか、最終的にこの人に魅せられたひとが悩んでるっていうか、なんかそういうとこに繋がって、なんか自分の中で。なんか、この女の人は、自分の身体が、その、クモで言ったら罨、、誘惑できると分かった上で、そこにいるのが、、、 気がします。なんか、繋がってないけど、そういう風に感じて。
N:自分に自信があるってわかるって言ってくれたんですけど、言ってくれたんですけど、それ、それがわかってるのに、近づけない、近づいたら、、、 あー、一緒のこと言ってる。あー。

《資料⑧》

A19:そういうのって、一回はまったら、頭の中でわかってても、戻られなさそうだなって思いました。
A20:理性ではどうにもならない感じっていうのがあるんじゃないかな。
N:なんか、本能のままにこの女性を欲しがっているっていう感じなんですかねー？
A19:いや、、、 そうじゃないんやー。
N:理性ではどうにもできない程、好きだ、、 違うな、、、 んー。理性が働かない程、、、 んー

《資料⑨》

N:では、先ほどは麗子像という、女の子の絵を見ていただきました。次は、女性の絵をみなさんで見てください。まずじっくり見てください。では、感じたこと、思ったことをみなさんと話していきましょう。

《資料⑩》

A10:さっき、エロ、エロスの話が出たんですけど、私が男だったら、てかまあ、女性が好きな人間だったとしたら、この絵が家に飾ってあったとしても、全然性欲がわからない。(一同:笑い)
N:なぜそう感じられたのですか？
A10:えっとまず、病的だなんて思って。そこと、あと、あの一、もしこの人は身体を見せつけてはいるし、多分自分の、自分は美しいと思ってるような感じがするんですけど、もし近づいていったら、なんか、近づいてきた人は、この人の虜になって、ダメになってしまう、その一、墮落させてしまうような感じがしたんですよ。
N:危険な女性って感じですね。そんなん聞いてたら。他の方どう思われますか？

《資料⑪》

A22:今、○○ちゃんの意見を聞いてて、似たようなこと思ってて、顔のほうがすごく細かく鮮明に描かれてるような感じがして、身体が、その一、これ描いた人が女の人の顔とかは、普段から見たりしてるけど、女の人の身体っていうのをちゃんと見てない。見たことがなくて、想像で描いてるのかなと思いました。
N:例えば、女性がいつも服を着ているとか、そういうことですか？
A22:なんか、それを目の前のモデルとして描いてるんじゃないかって、だからまあ、普通に知り合いだったとしても何にしても、その人の顔自体とかは普段から見るとかで描けるんかなーと思ったんですけど、身体とかは、確かにちょっと、、、 なんだろう、もっと顔に、同じくらい細かくとていうか、リアルに描いても、描かれていてもおかしくないかなって思ったんですけど、そんな感じはしなくて。

《資料⑫》

A24:なんかそしたら、さっきから官能的だとか、すごく女性的っていう話があって、最初に背景のラインの部分、もやが出るラインの部分が、私はものすごくエロティックだという風に感じたんですけど、女性の性器にちょっと似てるから、それをカバーするために女の人がある。さっきの羊水の中に女の人があるっていうやつも似てると思うんですけど、女性の中に女性がいるっていう感じに見えてきて。

N:すごいシチュエーションですね、それって。皆さんどう思われます？それ聞いて。

《資料⑬》

A22:なんか、その濡れてるって言うのを聞いて、水の上に浮かんでいる人なのかなという、思いました。

N:背景が今までね、何かわからなかったんですけど、今度水じゃないかって、毛束がこうできているのって、シャワーとか浴びてる時って、毛束がこう、水な感じ、ドロドロしたような。いかがですか？そういうの聞いてみて。

A26:今の昼と夜っていうのも、ああそうだなって感じなんですけど、さっき女性器っていう話があったけど、赤いところが動脈で、青いところが静脈っていう感じがしてきて、子宮の中とか、さっき妊婦、お腹の中にまた妊婦がいるって、だからなんか子宮の中って感じがしました。

N:あー、それがすごく強く感じられてますよね。身体ってすごい、赤と青でできてますしね。手首見てください。赤と青でできてますよね。体内のような気もしてきました。他の方どう思われますか？